



聖三木図書館ロゴ

イエズス会のイルマンとして両手を掲げ、人々に教えを説くパウロ三木。とともに左耳をそがれた。



発行日：2014年7月31日／発行者：荒谷 幸二郎／編集者：竹内 光／デザイン：鈴木 博文／題字：山本 廣
イエズス会聖三木図書館

〒102-0083 東京都千代田区麹町6-5-1岐部ホール内 Tel. 03-3262-0364 http://www.jesuits.or.jp/~j_seimikibun/



いのち以上のもの
— 悲惨の極み、大災害に見た心の輝き —
公益財 ひょうご震災記念
団法人 二十一世紀研究機構
理事長 五百旗頭 真

人は極限状況に追い込まれて、初めて何が一番大事かを知る。日常性の中では、あれもこれも欲しく、あれもこれも大事である。ちよつとした嗜好をめぐって争ったり、それがないと言って取り乱したりする。しかし、生死の際に立てば、そんなことはどうでもよくなる。生か死か、それが問題だ。

光放つ「家族の絆」

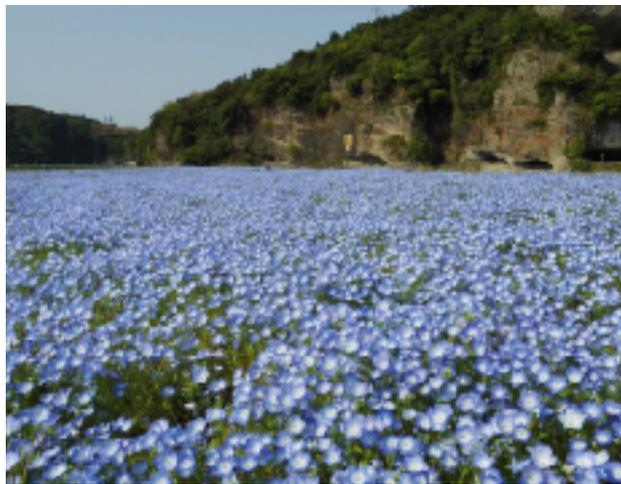
だから、いのちこそが何より大事だ、というのが、今の日本の通念である。しかし、私は震災体験を通じて疑問に思う。いのちは、人ひとり一人にただ一つの大事なものである。が、いのち以上に大事なものがあるとき多くの人が感じ、行動しているのではないか。

針の先ほどの偶然で死が多くの人を連れ去る悲惨の中で、人は自分が生かされている不思議に呆然とし、愛する者へのおしさをつのらせる。家族の絆が、大災害の中で光を放つテーマとなる。それは家族内に留まらない。町内の知人ももとより、見も知らない通りがかりの人にやさしく助けの手を差し延べる情景も珍しくなかった。

津波警報は度々出るが、いつものようにたいしたことあるまいと考えた人達があった。とりあえず地震で散らかった家の中を片付け始めた人も少なくない。二万人を超える犠牲者の多くが、こうして逃げない選択をした人々によって占められた。逆に、揺れたら逃げる、少しでも早く、少しでも高く、との教えを受け、訓練を重ねていた学校の生徒たち全員が助かるケースが多かった。

自己犠牲の数々

人々を助けようとして自ら犠牲になつ



シンボルの花 ネモフィラ

大分県中津市本耶馬溪の景勝地「青の洞門」をバックにこの春、青いネモフィラの花が一面に咲いた。花言葉は「ゆるし」で、聖三木図書館友の会のシンボルの花だ。ここは、旅の禅僧が十八世紀中頃三〇年余かけて岩山にトンネルを掘ったとされ、菊池寛の小説「恩讐の彼方に」で有名です。地域の人々が一昨年、洪水で冠水した田にネモフィラの種を蒔いたら美しく咲いて好評だった。それで「青の洞門」を訪れる観光客のためにも、今年も五〇アールの田に育てた。
(写真提供・中津市役所広報聴課)

た人も少なくない。消防士、消防団の人は津波に備え水門を閉めようと苦闘し、町に戻ると、まだ人々がいる。避難せよと叫び、手伝っているうちに津波に

襲われる。二七〇名もの消防関係者が犠牲になった。

宮城県女川町の佐藤さんは、津波の恐ろしさを知らない中国人研修生約二〇名をまず安全な高台に導き、自らは丘を下って犠牲になった。

南三陸町の二十四歳の婚約者のいる職員、遠藤さんは「まもなく6mの津波が来ます。すぐに高台に避難してください」と間際まで防災センターから放送を続け、犠牲となった。

名取市閉上は、津波が来るまで一時間以上の猶予をもらった仙台平野に位置する。一人のおばあさんが、住み慣れた家を離れたくないと避難を断った。放っておくわけにいかないと四人がかりで三分も説得に費やし、ようやく車に乗せると、津波に全員が流された。

一番早く三二分で津波が来た大船渡市の老人ホームでは、職員が世話をして七人のお年寄りをワゴン車に乗せたら、出発する間もなく車は津波に浮き上がった。高齢者や障害者を車椅子に乗せて懸命に走る人が、そここにいた。しかし、津波の猛スピードにはかなわない。不思議なことは、このままでは二人とも死ぬから、車椅子を棄てて自分だけ助かろうとした人が皆無に近いことである。それどころか「私を捨てて逃げてください」と頼まれても、この人を助けようと死力を振りしぼる。それが普通の情景だった。

モットー「人のために」

自衛隊員のように「事に臨んで、我が身を省みず」と宣誓している職務の人もある。「友のため命を捧げる。それ以上の愛はない」との言葉を知る人もいる。私の後輩の六甲学院生のように「Be good for Others」をモットーにしている若者たちもいる。しかし、そんなことを何も知らない人々が、悲惨の極みにあつて思わず人を助けようとする姿が省みず動く。いのちこそ大事である。その我がいのちを置いてでも、人や人々を助けようとする。
(次頁四段目へ)



キリシタン史ことはじめ

— 西歐文明が日本で開花 —

東京大学名誉教授 五野井 隆史

全てがザビエルから

フランシスコ・ザビエルは、鹿児島に着いて三ヶ月も経ない一五四九年十一月五日に、ゴアに書き送った書翰の中で日本の教育機関について、次のように報じている。都には大きな大学が一つあり、そこに五つの主要な学院がある。

都のこの大学の他に、主要な大学、すなわち高野、根来、フエイザン(比叡山、タノミニネ(多武峰)が都の周辺にある。各大学には三五〇〇人以上の学生(学問僧)がいると言われている。坂東と称する別の大学が甚だ遠い所にあり、それは日本では最大で主要なものである。また国内には小さな学校が多数ある。

五つの学院をもつ都の大学は五山の上位にある南禅寺、五つの学院は京都五山のことである。坂東の「別の大学」は足利学校である。ザビエルが日本の教育に最大の関心を持っていたことが知られる。彼は同じ書翰で、坂東と都の大学で学んだ仏僧二人を含む日本人四人がマラッカに戻る中国船に乗り、仏僧はインドに赴く、とも伝える。四人は翌年五月十五日マラッカでキリスト教に改宗し、三人が帰国した。

宣教の可能性を探る

ザビエルが日本にきた目的は、一五四九年一月十二日付のイグナティウス・ロヨラ宛書翰で表明していたように、先づ国王すなわち天皇のいる所へ行き、次に学問が行われている諸大学を訪れて、キリスト教宣教の可能性を探ることにある。日本の書物を見、学問僧と交流した結果を、自分たちがかつて学んだパリ大学に送り、同大学からヨーロッパの諸大学に発信してもらい、日本への関心を喚起することであった。天皇を訪問し、

都の主要な教育機関を訪れることは、イエズス会創設当初の同僚シモン・ロドリゲスにも伝えていた。

ザビエルは、一五五一年四月に再度訪れた山口で、中国地方最強の戦国大名大内義隆を正式に訪れて、一寺院を贈られた。彼はインドに戻ってヨーロッパの会員たちに書き送った一五五二年一月二十九日付の書翰で、大内氏から「学院 Colegio のような寺院(Ordem mosteiro)」を与えられたこと、日本に留まった会員たちが当地山口に修院(Ordem)を建て、そこで日本語と日本の諸宗派の物語(経典)を学ぶことになるとの構想を披露した。

彼はインドでは、同地到着の一五四二年五月に、直ちにサン・パウロ学院の設立に着手し、幼児教育についても、教皇パウロ三世がイエズス会に要請した「子供のための教理指導」に応えるため、各村に学校を設けて現地人の教師(カナカプレイ)を教理教育に当たっていた。

第一級の学者派遣の要請

ザビエルには、ゴアに設立したサン・パウロ学院に次いで山口にも学院を設け、これを日本語学習・仏教研究のセンターにし、学問僧をヨーロッパ、特にパリ大学に留学させて学問交流の拠点にしたいとの思いがあったようである。彼は日本に二年以上滞在して、日本文化の水準の高さ、仏僧の学問的素養の深さを痛感したため、ロヨラにはヨーロッパの第一級の哲学者・神学者の日本派遣を要請した。

ザビエルの教育機関設置構想が実現したのは、一五八〇年である。セミナリオ(神学校)が島原半島を支配した有馬晴信の日野江城下と、織田信長の安土城下に開設され、日本人修道士・聖職者養成のための教育が始まった。大友宗麟の豊後

白杵城下には二年制のノビシアド(修練院)が置かれ、翌年三月には、その修道士者が司祭になるためのコレジオが豊後府内の教会領域に造られ、哲学・神学のみならず、仏法(仏教)も教えられた。上記教育機関は、一五七九年に来日したイエズス会東インド管区巡察師アレシヤンドロ・ヴァリニャーノの建議により始まり、ローマ学院の教育方針が準用され、二十年後の一六〇一年に日本人最初の司祭二人が生まれた。

子供たちはラテン語の歌

仏僧や尼僧が教える寺子屋に通っていた子供たちは、教会で日本人伝道士らからキリシタン教理と読み書き算盤を習った。ザビエルに従って来日したコスメ・デ・トルレスは、一五六四年に住んだ有馬領口之津では子供たちの教育に配慮し、聖歌や詩編を日本語だけでなくラテン語でも歌わせていた。

【五野井隆史氏】一九四一年北海道生まれ。上智大学卒・同大学院退学。東京

する時、そこには、いのち以上に大切なものが示されているのではないか。たとえ、いのちの犠牲を伴っても、やりたいことがある。やるべきことがある。そういう心の輝きを持つ人々が、はしなくも悲惨のどん底で見えた大災害であった。

【五百旗頭 真(いおきべ、まこと)氏】

一九四三年兵庫県生まれ。京大法学部卒。神戸大名名誉教授。防衛大学校長、東日本大震災復興構想会議議長などを歴任し、現在熊本県立大学理事長など兼任。吉田茂賞、吉野作造賞などを受賞し、二〇一一年、文化功労者に。『日米戦争と戦後日本』など著書多数。

大学史料編纂所で『大日本史料』のキリシタン関係史料、のち「イエズス会日本書翰集」の編纂出版に従事。聖トマス大学大学院教授、東京大学名誉教授。著書『徳川初期キリシタン研究』、『日本キリシタン史の研究』、『日本キリスト教史』、『キリシタンの文化』など多数。

私にとってやすらぎの場所

土屋 文昭 (東京都在住)

聖三木図書館とのおつきあいは、もう20年近くになります。上智大学のなかにあった施設が閉鎖されたときはがっかりしました。その後、岐部ホールいまの場所に再開されたときは、信じられない思いで喜びました。聖三木図書館からは、たくさんの本を借り出して、ずいぶん多くを読みました。借りてきたキリスト教の本を読むのは、たいがい寝る前です。読んでいるうちに晴ればれと明るんだ気持ちになって気持ちよく寝つけます。

カトリックの聖人の自伝や伝記を読むのが好きで、見つけては読みふけています。読んでいるうちに、聖人のひたむきさや単純さに浄化されていくような気がします。フィル・キルロイ『マドレーヌ=ソフィー・バラ』(みすず書房、2008年)もその1冊です。600頁を超える大著で、読み始めるのに勇気が必要でした。それでも、物語に魅せられて思いのほか早く読み終わりました。聖心会創立者の内面というよりは、具体的な事実、詳細な事情によって、神さまが彼女をいかにお使いになったかが浮き彫りにされます。この本からは、ただ一つのこと伝わってきます。神さまは、出来事とおし、人とおして、この世の時間のなかで最善をなさるといことです。

雑事に追われているなか、聖三木図書館にたどりつくくと、しょうじきほっとします。かけがえのない場所の一つです。スタッフの方々の笑顔や親切のおかげだと思えます。これからどうかよろしくお願いいたします。



「イコン」が語りかけるもの

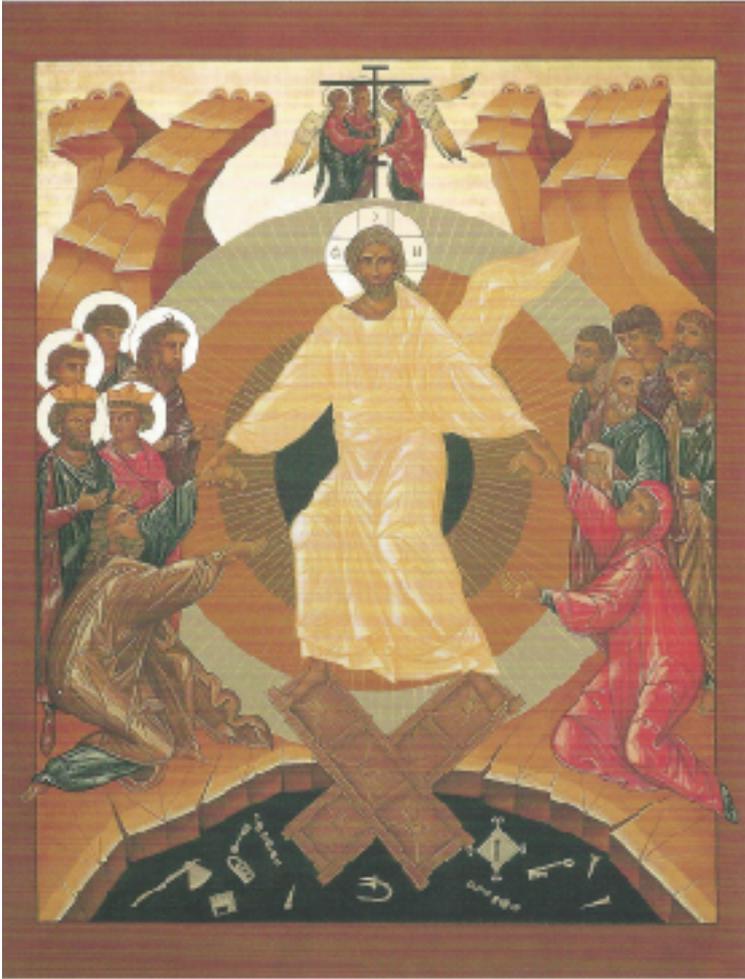
― 神の国の表現には、これしかない ―

イコン画家 鞠安 日出子

イコンは、カタコンベに描かれたキリスト教美術から誕生したと言われる。エジプトのミイラ上に置かれた肖像画などの影響を受けて四世紀から五世紀初期にはイコンとして確立した。イコンは誕生と同時に、一般の美術絵画やルネッサン以降の西洋のキリスト教美術や御絵などにはない意味付けを持っていった。カタコンベに描かれた絵図は、単なるイエス・キリストの物語ではなく、その

絵図化した神の言葉

イコンは、神の似姿を表した絵図である



鞠安さんが描いたこのイコンの題は『復活』。黄泉の国の扉（下段のX型）を蹴破ったキリストが、アダムとエバ（中段の左右）の腕を取って黄泉から引き上げた。それを両側にいる洗礼者ヨハネや弟子たち、モーセと預言者たちが見守っている。

（二〇〇七年出版の画集『イコン』から）

それ故、絵図にするイコンは神学に沿って厳格な規範に則って描かれる。聖書は神を言葉で表現するが、イコンはこの御言葉を絵図にして、そこに目には見えない神の似姿、神の国を表わそうとする。イコンは、見る者に秘められた神の似姿を垣間見させ、神の国に招き入れようと言っている。

東方教会の聖堂内にはイコンが壁や天井に至るまで余すところなく飾られ、時には外壁や入り口にも描かれたり掲げられたりしている。礼拝時には、イコンに描かれたキリストや聖人達がイコンから踊り出たような、独特な美の世界を聖堂いっぱいにも出し出す。祈りの旋律と相まって、祈りの人々は霊的世界、神の国に招き入れられるのである。

イコンは東方教会の人々の日常生活の中に浸透して、教会のみならず一般家庭や公共の場所、道端には小さなイコンのお堂が建てられ、時にはバスや運転席にまでイコンが見られる。人々は日本の仏壇や神棚を思わせるイコン棚の前で祈り、お守りやお札のように車に飾ったりもするが、これはしばしば迷信に近い信心に陥ることもなかりかねない。イコンは初期から、イコンへの崇敬は偶像崇拜ではないかとの批判に晒されてきた。イコンが一般家庭に浸透して信仰の対象になってくるとこの論争はますます激化し、七世紀から九世紀にかけてイコノクラスム運動が起り、イコンは危機に瀕した。それを乗り越えて今日に至っている。

無上の喜びに満たされ

イコンは神の似姿であり、イコンを見る者は神聖な神の国に招き入れられ、この神の国の美の中で無上の喜びに満たされる。このことこそが、イコンで祈る本当の意味であると言えよう。イコンを理解するためには、そのイコンが持つ神学的意味や構造を知ることが不可欠だが、何よりもまず直感的に、イコンに感動し、神の光の中に招き入れて頂けるよう、澄んだ心持でイコンの前に佇みたい。

よくイコンを描き始めた理由を聞かれるが、二十数年前、日本画を描きながら何とかして神の光を表現したいと試行錯誤していた私は、イコンの写真集から、神の国の表現はイコンにおいてあり得ない、正に一瞬の内に悟らされた。その時からイコンを描くようになり、イコンから離れられなくなった。イコンにある神の国を凝視しながら描いていると、私自身が神の国に参入させてもらっているような、限らない喜びに満たされる。これこそがイコン画家に授けられた神からの恵と感謝している。

【鞠安 日出子（まりあ・ひでこ）氏】

一九四〇長野県生まれ。東京学芸大学卒業。フランシス在住五年。院展出品、イコン展多数、元朝日カルチャーセンター講師。著書「神さまへの手紙」「光の中を歩んで」「あなたへの手紙」「信仰宣言」画集「イコン」、歌集、句集、監修「イコンの描き方」

